

健康長寿な島の地域包括医療

姫島村国民健康保険診療所

三浦 源太(大分県)

姫島は大分県国東半島の北東六km沖に位置する一島一村の離島です。古事記、日本書紀にも登場し、島内産出の黒曜石(国指定天然記念物)で作られた石器が全国で発見されるなど、古い歴史がしのべれます。現在の人口は約二千四百二十二人、高齢化率三三・九%、対岸とは約二十分のフェリー便が一日に十二往復しており、近海漁業と車エビ養殖が産業の中心です。夏に島内各所で行われる盆踊りの「キツネ踊り」が有名なで、お盆期間中には住民人口以上の観光客が島を訪れます。

姫島村の健康関連指標を見てみると、標準化入院受療比(大分県全体の年齢構成に再構成した地域指数・平成十三(十七年度平均)が八〇・〇、標準化入院外受療比が八五・四と、き

わめて低い医療依存度を示しています。その結果、平成二十一年度(四月(十二月)国保一人当たり医療費は十八万六千六百七十三円と、大分県平均二十五万九千六百の七二・一%という低い水準です。また、介護保険関連では要介護認定率一一・六%(平成十九年度・大分県平均一八・四%)、介護保険料月額三千五百円(平成十九年度・大分県平均四千二百十六円)と、これも低い水準となっています。

この数字だけでは、医療介護資源の不足の表現ということになります。注目すべきは、健康寿命(=平均寿命-要介護状態期間)が、男性七十五・三三歳(十八市町村中 県内八位)、女性八十一・四三歳(同 県内一位)と県内平均よりも長いこと

です。

医療介護に頼らない健康長寿をもたらしたのは何か? 思いつくままに挙げると、温暖な気候、安全な生活環境、野菜・魚介類を多く摂る食生活、高齢者の活躍参加できる場(老人会、高齢者教室)の活発な活動、地理的な医療フリーアクセスの制限などがあげられるでしょうが、姫島診療所を中心とした地域包括医療・ケアの実践(保健・医療・福祉の連携)も大きな要素だと考えています。

保健事業としては、ほぼ一〇〇%の小児予防接種。薬剤原価に近い低価格で行われる季節性・新型のインフルエンザワクチン接種補助。幼児期からの歯みがき教室や小学校でのフッ素洗口(三歳児むし歯有病率は二二・八%(大分県四〇・六%)。転倒予防教室・糖尿病予備軍教室などなどがあります。また、春秋の四日間に集団的に行う基本健診・特定健診や職場健診・節目健診を診療所が主体で行いデータ管理することで、早期の疾患アプローチが可能になっています。

医療体制としては、十六床の診療所に私を含め三名の医師が常勤し、二十四時間三百六十五日の医療が提供できています。自治医大後輩の義務年限中の医師二名には基幹病院で

の研修を週一日確保していますが、これは、医師個人の医療レベル維持向上はもちろん、診療所の医療レベルが停滞するのを防ぐ意味でも非常に重要と考えています。重症急患対応も大分県防災ヘリのドクターヘリ運用で大きく改善しました。これには夏休休暇中の医学生研修にあわせて行っているロールプレイング形式の訓練が非常に有効でした。

姫島診療所では、平成二十一年度到大分大学・大分県立病院から「地域医療・保健」研修として八名の研修医を一〜二週間づつ受け入れられました。研修医には入院・外来・訪問診療、外傷治療、救急対応、小児健診、保健活動に参加してもらっただけでなく、隣接する高齢者生活福祉センターでの介護実習など、福祉も含めた多面的な地域包括医療を経験してもらいます。今では地元住民有志による歓迎会(飲み会)も含めスムーズに受け入れができるようになり、研修医にも姫島研修の希望者が多いようです。

大分大学医学部にも地域枠入学者が増えつつある現在、短期間の診療所研修だけではなく、「その地域ならではの良い経験ができた」と言えるような地域中核病院の勤務・研修を、医療者と地域住民が協同参加してつくるのが重要と考えています。